

POINT OF VIEW

空想老後日記



谷口 とも美

2003年3月、最近街中の図書館へ行くと、目をもむけ、ドラスティックな変化に抗おうと
あつという問だった。その頃、電子書籍と呼ばれた本は、いまでは、「本」と呼ばれている。

2003年3月9日 (土)、朝の冷え込みは身に染みるが、庭の北東部を取り囲むように植えたコナラの高木の枝間から差し込む朝日は、周りの空気を温めるようなやさしさがある。もうすぐ春分だ。さて、この春は庭に何を植えようか。孫の代にたわむ実がなりそうな果樹は何だろうか。E L (Earth Library) で調べてみよう。

最近、外出も億劫になったせい、街中の図書館へ行くこともなくなった。調べたいことは、E L で済ませることが出来る。2015年ごろ、次から次へと建てられたあの公共図書館と呼ばれた箱モノは、いまはどんな風になっているのだろうか。7、8年前からは、各自自治体ごとに、公

民館と図書館を一体化した施設が役所の窓口となっている。確かに、各種証明書の発行を窓口で申し込んでいた時代もあったが、すでに、Libra Stationと呼ばれる役所の古文書部にその形跡が残されているだけとなっている。

その役所のサービス窓口は地域に住む人たちの交流の場となつていささか、どうしても紙の本が読みたいたいという古い世代の人たちや、懐古趣味を持つ若い人たちが、楽しむ場となっているらしい。それも新しいコミュニティだろう。

昔々もつと昔、「本」という紙でつくられた情報が貴重であった時代、図書館はその紙の本をたくさん揃え、きちんと読みなさい、正しく使いなさい、と管理に力を入れていた。あの頃は、紙の本と電子書籍(と呼ばれていた)の世代交代の速さを予測しよう

とせず、抗う勢力がまた幅を利かせていた。紙の本を扱う図書館が、サービスコストのアップに耐えられなくなる時代となつていくこ

知への自由が保障されていたとは言い難い時代を超えて、図書館という箱モノが真に進化したこの時代を、生きている間に見ることができたのは幸せだ。どこにいても、必要な情報とつながり、いながらバーチャルとリアルの融合がうまく進化した時代。老後のあり方、暮らし方を大きく変えてくれたE Lを活用して、あと少し、老後を楽しもう。

たにぐち・ともみ リフネット社長。13年ミライトグループに